6　結　　語

6－1　主要な調査成果

（1）創建時の様相を明らかにした

基壇規模は地覆石外周で東西約40.3m・南北約27.1m・高さ約1.8m。地山を削り出した上に50cm程の版築を施す。基壇外装は凝灰岩切石を用いた壇正積。建物規模は第6図の通りで、3章で指摘した従来の大岡説の問題点を解決した。基準尺長は1尺＝約0.295m。また柱径もある程度想定できるようになった。須弥壇は東西約21m・南北約7.5m。南面階段は一間幅階段が3基つく。東西面階段・回廊の中金堂取付部分は一間幅。外周の舗装は、バラス敷。なお、中金堂心座標は、X－146,407.78、Y－15,209.15である。

（2）変遷の状況を明らかにした

東西両面階段・回廊の金堂取付部分は、「宝字記」の記載から、天平宝字年間（757～765）までに複廊になる。奈良時代の間に、南面階段は五間幅の通し階段に、基壇外装に凝灰岩製の延石が使われ、玉石の雨落溝が作られ、外周の舗装は玉石敷、という改造が行われた。火災後の再建でも、平安時代にはこの形態が維持されるが、鎌倉時代には凝灰岩製の雨葛が用いられ、応永再建時には花崗岩切石の壇正積基壇外装となる。文政再建時には基壇外装は石垣に改造され、南面階段は三間幅に切り縮められる。

建物規模は基本的に創建期から踏襲されるが、応永再建中金堂では南面側柱筋が多少ずれる可能性がある。文政再建時には側柱までの規模で再建された。明治初頭には床が張られる。須弥壇は取り壊されるが、明治17年に石垣の外装で積み直され、その後大正以降にさらに積み足される。基壇外装・須弥壇外装も、花崗岩切石による壇正積に改造される。

（3）鎮壇具について一定の所見を得た

明治7年出土の鎮壇具は、須弥壇東半の土坑付近から出土したと考えられる。新たに出土した鎮壇具

第38図　礎石（ニ－9・8、西より）

第39図　基壇東側の様子（南より）

から、現在知られているよりさらに多くの鎮壇具が埋納されていたことが確認された。金延金が巻かれた状態で出土し、現在延ばされている東博蔵の金延金も巻かれていた可能性が高い。

6—2　考察と課題

（1）創建時の形態

創建期の興福寺中金堂は、正面階段は一間幅階段3基、東西に単廊がとりつき、基壇外装に延石はなく、周囲はバラス敷という、古い形態を色濃く残すものであった。基準尺長も奈良時代初頭にふさわしい数値である。これらから、中金堂建設は遷都からそう遠くない時期と考えられる。また、伽藍配置の形態についても再検討が必要であろう。

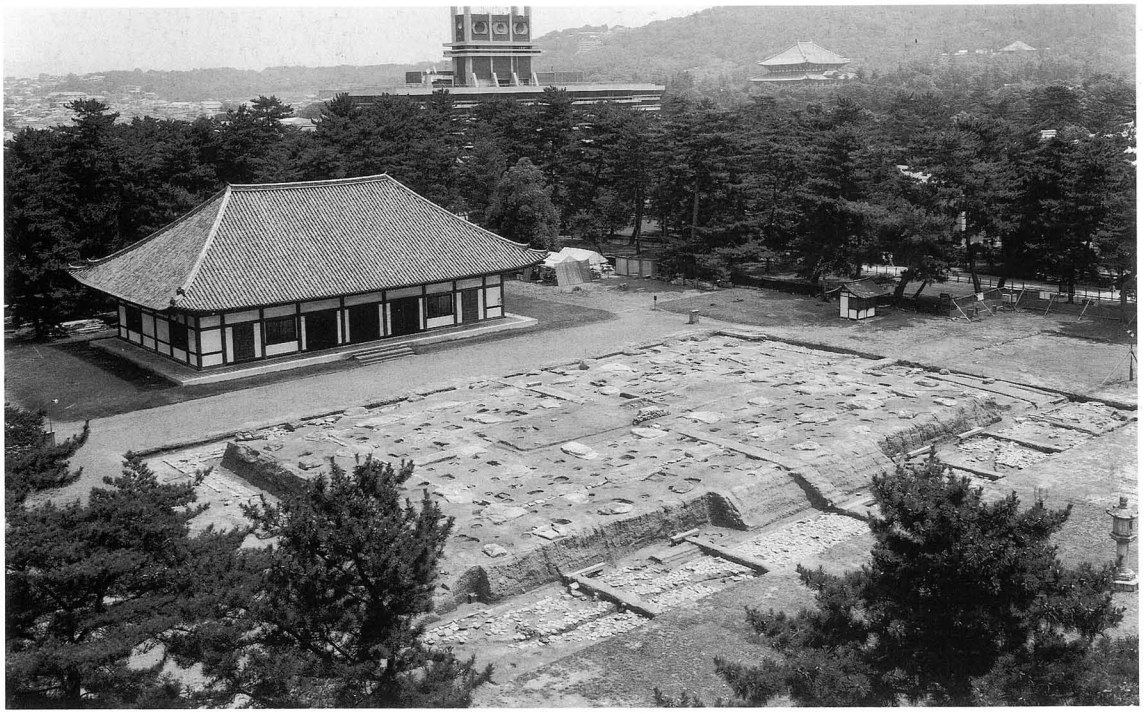
なお、裳階の隅木が柱筋に対し45°に出ない「振隅」となる可能性が高い。その意匠上の問題も含めて検討が必要である。

（2）改造について

奈良時代の間に、正面階段は五間幅の通し階段、回廊は複廊、基壇外装には延石・雨落溝を伴い、周囲は玉石敷の舗装という形態に改造された。飛鳥の形態を踏襲したような当初の計画から、平城京の寺院にふさわしいプランへの大改造が行われたと評価することができよう。ただし、その時期については、奈良時代中である以上細くは不明である。今後の回廊の調査の所見等も含めてのさらなる検討が必要である。

（3）興福寺と藤原氏

中金堂基壇が全体に地山を削り出していることが判明し、平城京を眼下に納める点も含めますますその立地条件の良さが浮き彫りになった。また、新たな鎮壇具の出土は、これまで知られる以上に多くの鎮壇具が埋納されていたことを示した。こうしたことは、興福寺造営を押し進めた力の大きさを如実に物語るといえよう。



第40図　調査区全景と東大寺（南西より）